

＜実践報告＞

異文化理解のための総合学習

伊藤純郎^{*}

1. はじめに

「今日の世界は急速に縮まっていき、諸国民間の接触と相互依存関係は、日々にその度合いを高めている。このような客観情勢の進展は、必然的に諸国民相互の理解と協力を要請してくる。すなわち、諸国民が国際社会に生きていくためには、国際理解と国際協力が必要なのである。ここに、今日、国際理解と国際協力のための教育が、諸国の国民教育のなかでとりあげられてくる理由がある¹⁾」この文章に指摘されるように、国際理解教育の必要性、重要性は、かねてより声高に叫ばれてきた。しかし、国際理解教育の具体的な方法および実践となると、いくつかの貴重な実践例報告はあるものの²⁾、まだ幅広く浸透したものとはいえない状況であろう。

本稿では、国際理解教育の意義・観点といった堅苦しい前口上は省略して、昭和57年度から本校で実践している「クロス・カルチュラル・トーク」（旧称「東南アジアの人々と語る会」）の紹介とそれに伴って実施している生徒の東南アジア観のアンケート調査の分析報告を発表することによって、現在の国際理解教育の問題点を共に考えていただきたく思う。

2. クロス・カルチュラル・トーク

いささか舌をかみそうな名称である「クロス・カルチュラル・トーク」（以下トークとする）は、かつて「東南アジアの人々と語る会」と称されていた、本校国際教育部・英語科が主催し、社会科・芸術科が後援する、中学3年対象の学年行事である。国際協力事業団筑波インターナショナルセンターの全面的な協力のもとに行なわれる「トーク」本番と、英語科・社会科・芸術科の授業や講演によって展開される事前学習、本番後のアンケート調査を中心に行なわれる事後学習によって構成される総合学習であり、昭和57年を最初に今年で7回を数えている。

(1) 事前学習

中学3年生全員を集めてのオリエンテーションでトークの趣旨説明を行なうことから始め、トークそのものの内容を把握させる。

① 欧米崇拜主義に陥りがちな英語観から脱却し、コミュニケーションの道具としての英語の

* 茗溪学園中学校・高等学校

資料 1

第 7 回 CROSS-CULTURAL

日 時	内 容
1ST PERIOD	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション (5/29 2:00 於: 第1 AVE) ・この企画の目的・各国の一般事情およびその文化の説明
2ND PERIOD	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで語り合う 2 カ国の希望を 1～5 番まで決定する ・役割分担の決定 ・ゲストにする一般的な質問を各自 5 つ作る準備 (資料の配布)
3RD PERIOD	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループへ決定されたゲスト国の伝達 ・国別地域研究 (国旗・地図・名札づくりの材料の配布)
4TH PERIOD	<ul style="list-style-type: none"> ・質問文の作成・日本紹介文の作成 ・各グループの司会者・24 の質問 (1 人が関係する事柄について 3 つしてもよい)・日本紹介の英文 10 以上を決定し、代表が高島・海老原まで提出
5TH PERIOD	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬座談会 (各グループの国旗・地図・名札を完成させ、英語科で高島・海老原の確認をうける)
JUNE 4 (SAT)	<p>10:40 AVE 1 へ全員集合。〔時間厳守〕 ゲストの入場・自己紹介 (各国の言葉での挨拶)</p> <p>10:55 各教室への移動</p> <p>11:05 座談会の開始。生徒の自己紹介〔3～5 の英文で〕</p> <p>11:10 ゲストのお話し</p> <p>11:20 質疑・応答</p> <p>11:35 日本のことを紹介する 2 人目のゲストのところへ移動</p> <p>11:45 生徒の自己紹介</p> <p>11:50 ゲストのお話し</p> <p>12:00 質疑・応答</p> <p>12:15 日本のことを紹介する</p> <p>12:20 終りの挨拶・感謝</p> <p>12:30 ゲストのお食事を会議室まで運ぶ お茶の接待</p> <p>13:00</p> <p>13:10 ゲストの食事をさげる</p> <p>14:00 親睦パーティー 於けるパントリー</p> <p>15:00 終了</p>

TALKの準備予定

CLASS NO. NAME

個人の仕事	グループの仕事	英語係・その他の仕事
ゲストにする一般的な質問と日本紹介のことを考える	グループ長の選出	オリエンテーションの資料配布
ゲストにする一般的な質問と日本紹介のことを英文で書く	グループ長の決定 希望の2カ国の1～5番目までの決定	希望国の調整
ゲストの国について図書館や英語科・社会科の部屋で調べ、INFORMATION SHEETに書く。役割分担の仕事をする	役割分担を決める 国旗2枚 [] [] 地図 [] [] 名札 [] []	
明日にそなえ、質問などをよく練習しておく	各グループで司会者の決定 [] 食事担当 [] [] 模擬座談会で練習	最終打ち合わせ
筆記用具・名札などを持って集合 案内係り以外は各教室で会場の設営 話すときは、あせらず、てれず、大きな声で、ゲストをよく見ながら話しましょう 気楽に参加しよう。飲物とお菓子のサービスあり。日本語でも可かな？	代表はゲストを自分たちの教室へ案内する 司会は始めと終りの挨拶を大きい声でしっかりする。話しをとぎらせないことがよいマナーです。楽しいムードをつくってくださいね	お昼のお茶の接待 パーティの準備 パーティでの接待

実践をはかる。

- ② アジアをはじめ世界の国々についてより正確な知識を深め、世界の中の日本の役割を考えさせる。
- ③ さまざまな国の人々の英語に親しませる。
- ④ グループ活動を通じて自主的学習態度を養う。

この4つを主たる目的として行なうこと、当日は外国の方々を学校に招き、座談会形式で交流を深めること、そのためにグループごとに2カ国を選び、事前に研究すること等を説明し、学習の準備にとり組ませる。(オリエンテーションでの配布資料は資料1を参照)。

この事前学習の過程で芸術科・社会科の授業を中心に東南アジア諸国をはじめとした発展途上国の歴史や文化を学ぶのである。音楽科では「民族音楽めぐり」と題して「カシミールのしらべ」(サントゥールによる合奏)〈パキスタン〉、「村の歌」(西ジャワのカチャピ独奏)〈インドネシア〉、「森へ帰る鳥」(広東地方の胡弓演奏)〈中国〉等、13カ国の民族音楽を紹介し、その何曲かを実際に演奏することに挑戦させる。社会科では東南アジア諸国を中心に日本文化との関わりについて、教員が実際にとったスライドを見せ、歴史と文化についてまとめさせる。一方、英語の授業では、1グループ8人で地域研究が行なわれ、集めた資料をもとにして英文の質問が作られていくのである。こうして各自が最低5つの質問文を用意してトーク本番に臨むのである。この事前学習を入念に行なうことにより、生徒へ異文化への偏見や誤った知識をなくすことに努めている。

(2) 「トーク」当日

トーク当日は、かねて依頼してある筑波インターナショナルセンター研修員を招いて(今年は11カ国30人)開会式の後、ゲスト1人に対し生徒7・8人の形で、生徒の自己紹介・ゲストの話、そして事前に用意した質問事項のやりとりを中心に座談会が行なわれる。このトークの特徴の一つは「英語」でなされる座談会というところにあり、英語が見事に通じ明るい笑い声が聞こえるグループもあれば、身ぶり手ぶりが必要なグループ、英語が通じずまるでお通夜のグループと様々であり、国際理解の障害の一つに言葉の壁があることを思い知らさせる者も多いようである。教員も各グループについて一緒にトークに参加する。(英語科教員はともかく、社会科教員なども生徒同様、言葉の厚い壁につき当たることも多い。)とにかく事前学習で用意した質問事項すべてをゲストにぶつけるのである。

午前中2時間かけて座談会を行ったあと、午後は自由参加のティー・パーティーが行なわれる。午前中の堅固しい雰囲気とは対照的に、なごやかに繰り広げられるのが不思議である。

(3) 事後学習

トーク終了後、全員対象に英語科・社会科がアンケート調査を実施した。英語科のアンケートは、トークそのものに参加しての感想やゲストとの話から学んだ点などを中心に構成されている。生徒の感想を読むと、トークそのものについては、約76%のものが良かったと答えているが(資料2参照)、理解となると仲々大変だったようである。

資料2 英語科アンケート「クロス・カルチュラル・トーク」をどう思ったか。

	外国に住んでい たことがある	旅行で外国に行 ったことがある	一度も外国に行 ったことがない	計
とても良かった	8 27.6%	13 31.7%	36 34.3%	57 32.6%
良かった	15 51.7%	19 46.3%	44 41.9%	78 44.6%
どちらでもない	5 17.2%	7 17.1%	16 15.2%	28 16.0%
良くなかった	1 3.4%	1 2.4%	7 6.7%	9 5.1%
ひどかった		1 2.4%	2 1.9%	3 1.7%
計(人)	29	41	105	175

「普段あまり関心のなかったエジプトやインドネシアのことについていろいろ調べたり、実際に会ったりして自分の国の人たちとちがった考え方、生活の仕方がわかり、ためになったと思う。中学2年間と少しの間に習ったことで、こんなに話し合えるんだなあと思いうれしかった」女子の一人はこう書きしるしたあと「やっぱり"外国人"という意識で本当に親しくはなれなかった。友達と一緒にだと"通じなかったらはずかしいなあ"という気持ちで、なかなか話が出来なかった」と素直にのべている。

「とにかく東南アジアの人と交流するというのはめったにないので東南アジアのことについて少しでも理解することが出来たことが、一番良かった点だと思います。あと外国の人と英語で会話するという感覚が体験出来て良かったです。話した英語がそのまま通じるというのはもう感激ものです。」この女子の文にあるように「とにかく英語が通じた」という感激を一番強くもった者が結構いたようである。

資料3 国民性の特色に関する調査結果 - 1983年と1988年の比較 -

調査項目		中国			大韓民国			フィリピン			インドネシア			ベルマ		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1.よく働く勤勉な国民だ。	88年	63.8	25.5	10.7	56.8	40.1	3.1	28.1	50.4	21.5	25.6	65.3	9.1	27.4	64.6	8.0
	支持率	65.8			73.8			31.8				54.2			51.7	
2.意志が強くて忍耐がある。	83年	82.0			52.5			35.0				38.0			35.5	
	支持率	52.9	40.9	6.2	39.9	54.3	5.8	26.9	59.8	13.3	27.1	63.8	9.1	31.3	63.0	5.7
3.何でも進んでやろうとする積極性がある。	88年	67.2			61.3			43.5				49.9			57.1	
	支持率	59.0			50.0			45.0				56.5			26.0	
4.平和を愛する国民だ。	88年	38.6	50.7	10.7	43.2	52.4	4.4	32.7	59.5	7.8	23.7	65.8	10.4	17.6	70.0	12.4
	支持率	53.3			65.0			54.7				51.1			40.2	
5.つきあって信頼できそうだ。	83年	42.0			22.0			34.0				16.5			23.0	
	支持率	53.1	42.3	4.6	40.4	46.6	13.0	50.9	36.8	12.3	50.0	47.8	2.2	59.8	32.5	7.7
6.将来めざましい発展が約束されている。	88年	69.8			50.7			57.0				71.1			68.4	
	支持率	40.4			36.5			62.0				64.0			66.0	
7.つきあって信頼できそうだ。	88年	38.2	46.2	15.6	23.6	75.0	1.4	28.6	48.8	22.6	31.1	59.1	9.8	50.3	42.0	7.7
	支持率	45.7			59.7			30.4				51.3			63.6	
8.将来めざましい発展が約束されている。	83年	37.5			22.0			35.0				43.0			23.0	
	支持率	40.4	49.3	10.3	51.4	39.1	9.5	16.8	60.9	22.3	13.7	69.5	16.8	11.2	72.8	16.0
9.将来めざましい発展が約束されている。	88年	54.8			80.5			25.0				31.7			31.6	
	支持率	55.0			42.0			33.0				29.0			14.0	

資料4 親近意識の調査結果 - 1983年と1988年の比較 -

調査項目		中国			大韓民国			フィリピン			インドネシア			ベルマ		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1.その国の人とならずにすぐ友達になれる	88年	36.3	48.7	15.0	22.2	60.0	17.2	31.6	47.1	21.3	30.6	55.0	14.5	21.9	61.4	16.6
	支持率	45.7			35.3			33.9				43.6			36.0	
2.その国の人とならずにすぐ友達になれる	83年	33.5			21.5			42.5				34.5			45.5	
	支持率															

2. 将来その国の人と結婚してもよい。	88年	%	12.0	32.4	55.6	9.6	30.6	59.8	9.3	27.1	63.6	8.9	34.2	56.9	7.7	37.6	54.7
	83年	支持率	-27.4	-31.5		-34.9	-37.0		-40.7	-33.0		-30.9	-36.0		-28.2	-42.5	
3. 芸術・文化で学ぶべきものがある。	88年	%	71.1	23.6	5.3	40.5	44.4	15.1	34.4	48.2	17.4	39.9	49.3	10.8	43.6	51.1	5.3
	83年	支持率	77.6			47.6			41.1			53.8			63.8		
4. 学問・科学・技術で学ぶべきものがある。	88年	%	39.6	48.0	12.4	19.9	55.0	25.1	13.7	62.8	23.5	10.2	66.7	23.1	11.8	64.1	24.1
	83年	支持率	51.2			22.3			21.6			20.5			19.8		
5. 人間の生き方で学ぶべきものがある。	88年	%	42.5	51.6	5.9	30.3	56.1	13.6	30.8	57.7	7.5	32.1	58.3	9.6	39.6	54.5	5.9
	83年	支持率	62.4			44.8			52.2			51.7			61.0		
6. 貿易の相手国としてみます重要なになる。	88年	%	48.0	44.0	8.0	42.3	47.7	10.0	23.4	51.6	25.0	32.2	54.2	13.6	17.4	67.0	15.6
	83年	支持率	62.0			56.2			24.2			45.7			35.3		
7. 親しい交流が日本の政治経済にプラスとなる。	88年	%	47.6	42.7	9.7	36.9	50.0	13.1	23.6	55.6	20.8	27.2	58.0	14.8	20.9	58.5	20.6
	83年	支持率	59.3			51.5			30.6			41.4			29.6		
8. その国の人を輸血されてもいい。	88年	%	17.3	31.9	50.8	18.3	35.9	45.8	17.4	35.7	46.9	13.4	38.1	48.5	12.8	36.3	50.9
	83年	支持率	-17.5			-9.5			-11.6			-16.0			-19.9		
9. 好きである。	88年	%	44.6	42.3	13.1	28.6	50.5	20.9	26.2	50.2	23.6	35.6	47.9	16.5	31.4	50.7	17.9
	83年	支持率	52.7			58.2			27.7			43.1			38.9		
10. 行ってみたい。	88年	%	68.0	19.2	12.8	49.8	29.4	20.8	46.7	28.9	24.4	51.6	30.2	18.2	51.1	32.3	16.6
	83年	支持率	72.8			43.7			36.8			48.5			50.7		
11. 住んでみたい。	88年	%	26.7	35.1	38.2	15.4	44.8	39.8	20.5	37.2	42.3	22.3	42.7	35.0	17.4	41.5	41.1
	83年	支持率	6.1			-2.0			-3.2			8.7			-3.6		
	83年	支持率	-	9.0		-46.0			-	7.0		-26.0			-18.5		

3. 生徒の東南アジア観

一方、社会科のアンケート調査は、トークそのものの感想とは離れて、生徒の東南アジア観について、トーク終了後、毎年実施しているものである。このアンケートによる調査は、国民性の特色に関する調査と親近意識の調査の2つから成りたっており、具体的な調査項目はこの後述べる「比較表」に収められているものである。³⁾

この調査の今年と5年前の1983年の調査結果を対比させたものが、「比較表」(資料3・4)である。表の見方を簡単に説明すると資料3の「国民性の特色に関する調査結果」は左側にある1～6の調査項目について、1983年の10カ国、今回の11カ国を対象に行ない共通の5カ国の結果を示している。生徒が答える場合「よく働く勤勉な国民だ」という項目につき、各国について「そう思う」のであればA、「どちらともいえない」時はB、「そうは思わない」のであればCと記入させ、ABCの数をパーセンテージで示したものである。さらに支持率とは集計結果を数的に算出して対比する便宜上、 $A + \frac{B}{2} - C$ との数式によって出したものである。この数値の学問的妥当性は別にして、要するに別の年度や国別相互間の調査結果を対比するために出した便宜的数値であり、評価の高低を示す絶対的数値ではないことに注意すべきで、いわば対比のための相対的数値である。

この調査結果の分析については、すでに報告してあるので、⁴⁾ここでは簡単な総括にとどめておくと、本校中学3年生に関しては次のような東南アジア観が見られる。

- ① 国民性に関しては東南アジア諸国に対する支持率は高く、韓国の支持率の伸びが著しい。
- ② 親近意識のうちの文化的受容面(項目3～5)の支持率は群を抜いていた中国に他の国が並びつつある。
- ③ 経済関係面(項目6・7)の支持率は韓国を除けば下降気味である。
- ④ 心情的親近感に関しての伸びは鈍く、友達になれる→行ってみたいものの、好きになり→結婚してもよいとはいかない。
- ⑤ 以上、東南アジアに対する国民性、親近意識の支持率は上昇傾向にあるが、心情的親近感の上昇は鈍いという指摘が可能になる。どうやら知識・理解のみの国際理解であるようだ。

今回の調査で顕著であった韓国の支持率の上昇は、ソウルオリンピックに象徴される韓国の知名度の上昇と大きくかかわっていると考え、マスコミ報道が生徒の意識にいかにか大きなウェートを占めるものかと驚かされる。⁵⁾

4. おわりに

この結果を見るまでもなく他国、他民族の共感的理解がいかにか容易でないかがわかる。こうし

た理解をいかに変容させるか、一般には、⁶⁾

- ① まず誤った知識や不十分な大衆報道による偏見を除去する。
- ② ついで正しい知識や豊富な資料による正確な知識・理解を持たせる。
- ③ そのうえで人権尊重、ユネスコ精神に基づく共感と心情的理解、意識・態度の変容をめざす。

の3段階が言われており、このうち①と②は学校教育の一般カリキュラムで達成することは比較的容易であるが、③の心情的理解は学校の通常の指導法では困難である。そこで生徒の主体性をふまえての総合カリキュラムによる問題解決学習の指導形態の必要性が強調されるのである。その意味において、本稿でその一部を紹介した総合学習「クロス・カルチュラル・トーク」が、心情的理解のための実践となりえているかどうかは今後の一層の検討に待つとして、異文化理解のための導入学習として、カリキュラムの枠をこえた実践として位置づけられると考えている。

注

- 1) 日本ユネスコ国内委員会編『国際理解教育の手引き』東京法令出版 1982年。
- 2) 同上書において新宿区立西戸山小・筑波大学附属中・私立帝塚山学院中・東京学芸大学附属中等がある。
- 3) この調査項目自体は、横山十四男「態度変容をめざす『東南アジア』学習指導」(『東京教育大附属中研究紀要』第22,23合併号,1973年)における調査項目を活用させていただいた。
- 4) 拙稿「近くて遠い国,遠くて近い国」茗溪学園国際教育部『JUNCTION』第2号,1988。
- 5) 中国の場合,日中共同声明を境に支持率が大きく上昇したという報告がある。横山十四男「東南アジア学習指導のあり方を求めて」『研究紀要』第30号,1979。
- 6) 前掲書3)

(附記)「茗溪での実践を紹介下さい」という編集子の求めに応じて「トーク」の紹介を試みましたが、紙面の関係もあり、実践の概要しか述べられず、中途半端になってしまったことをおわび致します。それにしましても、今回の調査項目の内容をはじめ、異文化理解に関する多くの御教示を横山十四男先生からいただきましたのは6年も前になります。その調査結果の報告を横山先生御退官の年に行なうことに対し何ともいえない感慨が胸にこみ上げて来ます。私個人および本校への数多くの御指導、本当にありがとうございました。